

熊野の
ホコから

怪野の熊

其の三 「天邪鬼」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

江戸時代の妖怪師、鳥山石燕(りやま・せきえん)によって描かれた天逆每(あまのざき)。天邪鬼の先祖といわれている。(国会図書館近代デジタルライブラリーより転載)



串本の名勝に橋杭岩がある。串本から大島に向けての橋の杭のような奇岩が連なった姿は、昭和の怪奇映画「吸血鬼ゴケミドロ」のラストシーンでも採用された。この橋杭岩の成り立ちに関し、人の邪魔ばかりするヒネクレものの天邪鬼(あまのじゃく)の話が伝わっている。

その昔、弘法大師と天邪鬼が熊野地方を旅して串本までやって来た。弘法大師は大島の人々のため、夜の間に橋を架けてやろうと思ひ、天邪鬼にも手伝うよう依頼する。天邪鬼は手伝うことは手伝うものの、なまけてばかりで役に立たない。弘法大師は、次々と大岩を山から担いできては海中に次々建てていく。このままでは朝までに橋ができてしまうと天邪鬼は考え、どうにか邪魔できないか思案する。そこで、弘法大師が夜の間に橋を架けてしまおうと言っていたことを思い出し、ニワトリの声を真似て朝がきたと弘法大師を騙(だま)したところ、まんまと弘法大師は騙されてしまい、作業を途中で止めてしまう。このために、橋杭岩は海の途中で止まっているということだ。天邪鬼は口まねが上手いため、木霊(こだま)や山彦(やまびこ)のことをアマノジャクと呼ぶ地方もある。



橋杭岩は、大島までつながることはなかったが、名勝として古くから人々の関心を惹(ひ)いてきた。

ここででも工事が途中で終わったかのような奇岩が見られる。江戸時代の百科事典である『和漢三才図会』には「先代旧事本紀」からの引用として、スサノオが吐き出した体内の猛気が天逆每(あまのざき)という女神になったとあり、これが天邪鬼の祖先となったとされている。天逆每は、気が荒く、物事をあべこべにしないと気の済まない性格で、前のことを後ろ、左のことを右などと言って周囲を困らせたという。

天邪鬼は天逆毎の性格を受け継いだ。現代では「他者多数派」の意見に、いちいち逆らうひねくれ者「本心に素直になれず、周囲と反発する人」またはそのような言動を指して、「天邪鬼(な人)」と称されるようになった。昔も今も、人々は天邪鬼には困惑させられたということだ。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール



昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。